

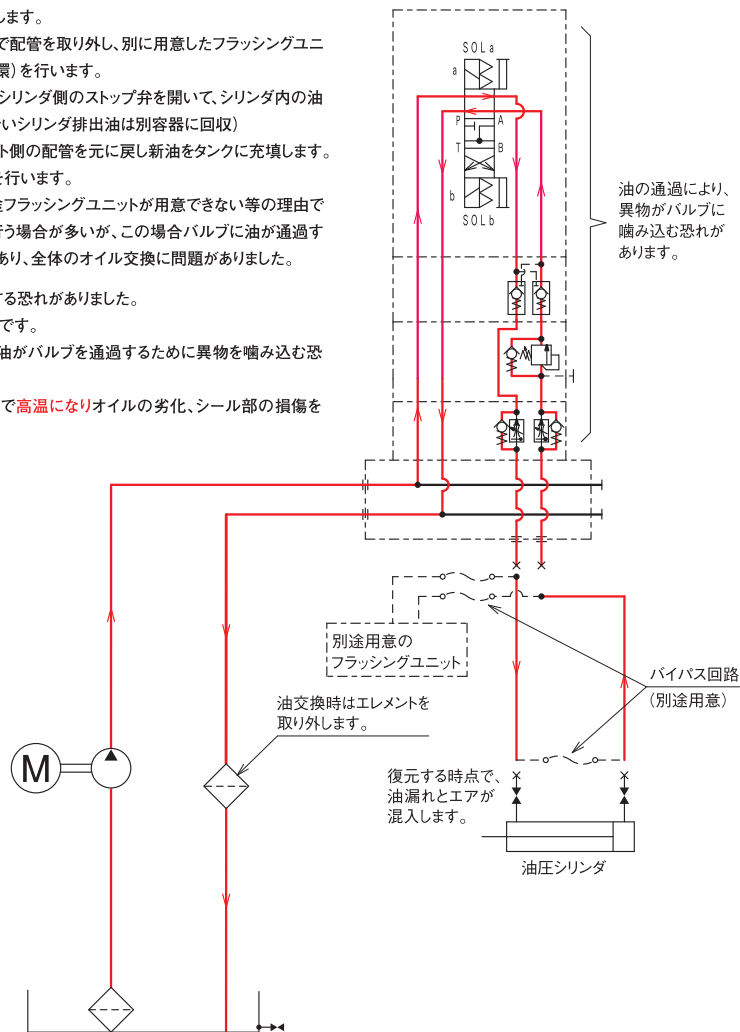
MI 611システム

油交換要領の比較

■現状の場合

- ①タンク内の油を抜き取ります。
- ②キャップ側、ヘッド側のストップ弁を閉じ、キャップ側、ヘッド側配管を取り外し別途用意したホースにて短絡します。
- ③油圧ユニット側の配管出口部で配管を取り外し、別に用意したフラッシングユニットと接続し、クリーニング(循環)を行います。
- ④シリンダ側の配管を元に戻し、シリンダ側のストップ弁を開いて、シリンダ内の油の交換を行います。(交互に行いシリンダ排出油は別容器に回収)
- ⑤油交換が終わると、油圧ユニット側の配管を元に戻し新油をタンクに充填します。
- ⑥ポンプを運転しエア抜き作業を行います。
- ⑦2~5の工数が多いこと、別途フラッシングユニットが用意できない等の理由でシリンダ側だけのバイパスを行う場合が多いが、この場合バルブに油が通過する際に異物を噛み込む恐れがあり、全体のオイル交換に問題がありました。

- 復元の際、エア・ごみの混入する恐れがありました。
- 作業時に油漏れが発生し危険です。
- クリーニング(循環)時に作動油がバルブを通過するために異物を噛み込む恐れがありました。
- 混入した残留エアは断熱圧縮で高温になりオイルの劣化、シール部の損傷を招きます。



油の通過により、異物がバルブに噛み込む恐れがあります。

■MI611システムによる油交換の場合

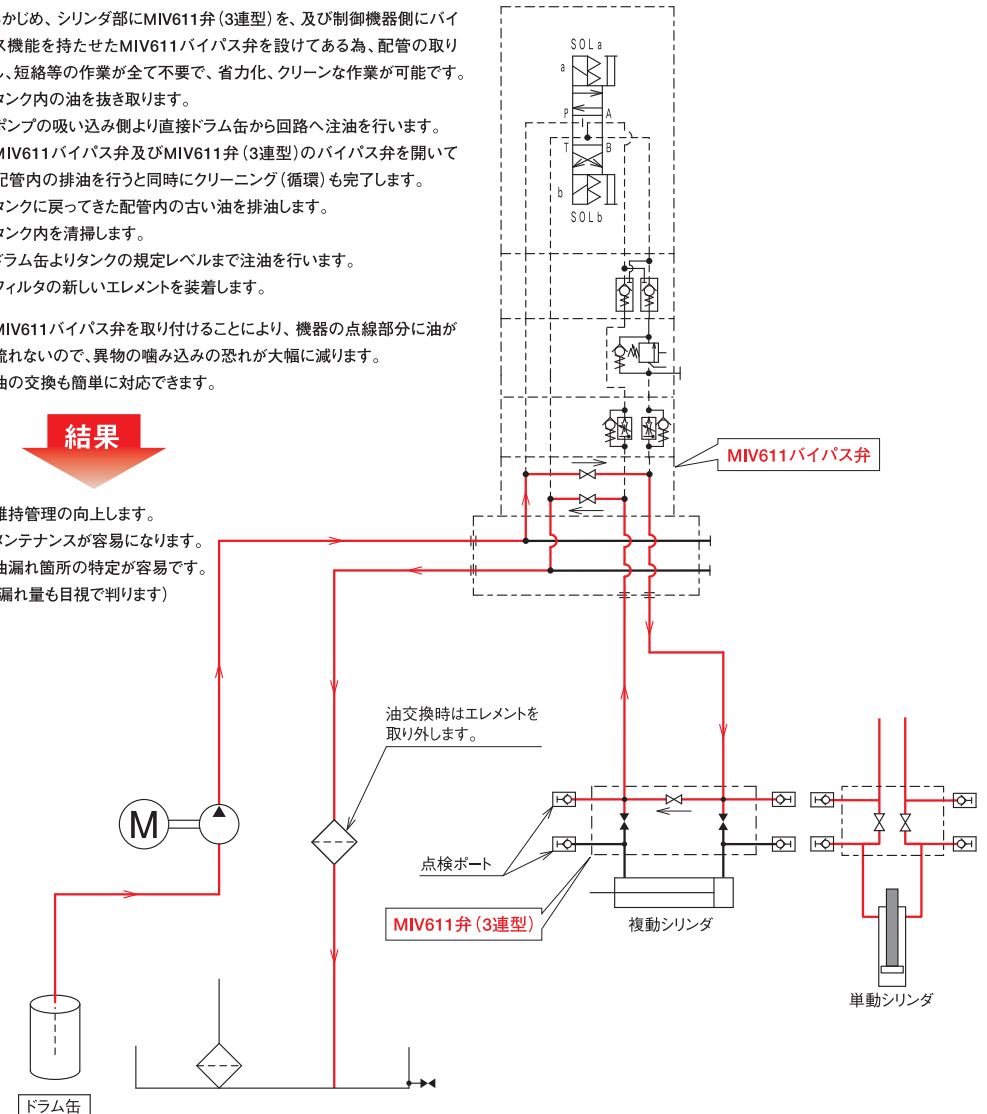
あらかじめ、シリンダ部にMIV611弁(3連型)を、及び制御機器側にバイパス機能を持たせたMIV611バイパス弁を設けてある為、配管の取り外し、短絡等の作業が全て不要で、省力化、クリーンな作業が可能です。

- ①タンク内の油を抜き取ります。
- ②ポンプの吸い込み側より直接ドラム缶から回路へ注油を行います。
- ③MIV611バイパス弁及びMIV611弁(3連型)のバイパス弁を開いて配管内の排油を行うと同時にクリーニング(循環)も完了します。
- ④タンクに戻ってきた配管内の古い油を排油します。
- ⑤タンク内を清掃します。
- ⑥ドラム缶よりタンクの規定レベルまで注油を行います。
- ⑦フィルタの新しいエレメントを装着します。

- MIV611バイパス弁を取り付けることにより、機器の点検部分に油が流れないので、異物の噛み込みの恐れが大幅に減ります。
- 油の交換も簡単に対応できます。

結果

- 維持管理の向上します。
- メンテナンスが容易になります。
- 油漏れ箇所の特定が容易です。(漏れ量も目視で判ります)



MIV611バイパス弁

MIV611弁(3連型)

点検ポート

複動シリンダ

単動シリンダ

ドラム缶